

# 「創造性・活動・奉仕」(CAS)

## 補足資料

2010年卒業予定者から適用

ディプロマプログラム (DP)

## 「創造性・活動・奉仕」(CAS) 補足資料

2012年12月に発行の英文原本 *Creativity, action, service: Additional guidance* の日本語版  
2014年6月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、  
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

**注：**本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。

非営利教育財団 国際バカロレア機構  
(International Baccalaureate Organization)  
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所  
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd  
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate  
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト : [www.ibo.org](http://www.ibo.org)

© International Baccalaureate Organization 2014

国際バカロレア機構 (以下、「IB」という。) は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくは [www.ibo.org/copyright](http://www.ibo.org/copyright) をご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール : [sales@ibo.org](mailto:sales@ibo.org)

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、International Baccalaureate Organization の登録商標です。

**Note:** Creativity, Action, Service has been renamed to Creativity, Activity, Service. Although the word Action may appear in this document, please ensure you refer to it as Activity when leading this workshop.

## はじめに

本資料は、「創造性・活動・奉仕」(CAS)に関する「よくある質問」について説明することを旨として作成されました。IB資料『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)と同『DP手順ハンドブック』も必ず併せてお読みください。本資料は、あくまでも補足資料として上記の手引き、および、ハンドブックと関連して読まれるべきものであり、これらに代替するものではありません。

本資料は、2部構成になっています。第1部では、現行の「指導の手引き」のカリキュラムについて、第2部では、CASの実施と組織化について述べています。

特に注がない限り、本文中の引用は『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)に基づいています。引用には、参照箇所として「指導の手引き」(PDF版)のページ番号を記載しています。

## より詳しい情報を得るには

本資料は、質問のすべてに答えているというわけではありません。各学校は疑問点がある場合には、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』を参照してください。さらに詳しく知りたい場合は、以下で情報を得ることもできます。

- ・ オンラインカリキュラムセンター (OCC) のCASフォーラム  
質問をしたり、CASの実践例を共有したり、ディスカッションをしたりすることができます。
- ・ OCCのCAS用セクション  
大小さまざまな規模のCAS活動例を探すのに適しています。それぞれの学校がどのように独自のCASプログラムをつくり上げていったかを知ることができます。
- ・ IBウェブサイト「IBアンサー」(<https://ibanswers.ibo.org> または [ibid@ibo.org](mailto:ibid@ibo.org))
- ・ IBウェブサイト「グローバルエンゲージ」(<http://globalengage.ibo.org>)
- ・ 『CAS illustrated (CAS 実例集)』(英語版)  
IBの最近の図書で、IBの全3地域(アジア太平洋、南北アメリカ、アフリカ・ヨーロッパ・中東)におけるIBワールドスクール(IB認定校)での優れたCASプロジェクトの実例を紹介しています。IBオンラインストア(<http://store.ibo.org>)で入手可能です。
- ・ CASワークショップ
- ・ IB地域会議 (regional conference)
- ・ IB認定校の地域ネットワーク

## 第1部 カリキュラム

### CASの由来は何か なぜディプロマプログラムの一部となっているか

CASは、これまで常にディプロマプログラム（DP）の一部であり続けてきました。1968年に必修コースとして始まった「理論的・実践的な美術入門」がその前身です。そして1970年にそこに「身体的、社会奉仕活動の側面がつけ加わり」（Hill 2010: 80）、1970年代には、教育者クルト・ハーンの影響を受けてコースがさらに発展しました。ハーンの理念の中心には、「生徒たちは直接的な体験から最も有益に学ぶことができる」という考えがありました。ハーンは、人格形成には認知的発達とともに身体的、社会的活動が必要であると信じていたのです。IBは全人教育の一環として、DPのカリキュラムを通じてIBの全生徒が、何らかの**創造的**（creative）、**美的**（aesthetic）、または**社会奉仕**（social service）に関わる活動（CAS）に取り組むことを決めました。

1989年にCASはCAS、つまり**創造性**（creativity）、**活動**（action）、**奉仕**（service）となり、3つの分野が同等な重要性をもつようになりました。新しい名称から「社会」（social）の文字が取り除かれたのは、学校によってはさまざまな理由により地域社会と関わることが不可能な場合があったからです。1990年代初頭にはCASを完了することが国際バカロレア資格（IB資格）授与の要件となりました。

1996年版および2001年版の『「創造性・活動・奉仕」（CAS）指導の手引き』では、CASの2つ以上の分野を組み合わせた長期間にわたるコミュニティープロジェクトを含むことが奨励されました。また、教育的見地からCASのモニタリングに「自己達成」「スキル」「個人的資質」「対人関係」「グローバル意識」の5つの規準を取り入れ、生徒のCASプログラムを評価しました。これらの「指導の手引き」には、「振り返り」を導くための質問が記載されました。生徒は、自分が関わった全活動への総括的な「振り返り」とCAS体験を最終的にまとめた小論文を書くことが求められ、これらの執筆がCAS活動完了の証拠として見なされました。生徒が高校卒業後にCASでの活動を履歴書に記載することもよく見られました。

現行の『「創造性・活動・奉仕」（CAS）指導の手引き』（2008年刊）では、プログラム期間中に少なくとも3回の面談を行い、学習成果を収めた証拠を示すことを要求しています。「CASを完了するためには、生徒は、上記の8つのすべてについて成果を収めたことを示さなければなりません。多様な活動の中で繰り返し示される成果もあるかもしれませんが、CASの完了には、各成果について**何らかの**証拠があれば要件を満たします」（7ページ参照）。「指導の手引き」ではまた、最低でも1つのプロジェクトで、CASの要素のうち2つ以上を含む長期間にわたる活動を、他の人と協働して行うことを要求しています。

---

CASでは、生徒のアイデンティティの構築に役立つことを重視しています。「IBの使命」や「IBの学習者像」の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティを構築するのを後押しするのです。場合によってはCASは、DPを構成する他のどの要素よりも、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築く」という「IBの使命」に最も貢献しているといえるかもしれません。

## CASの活動にはどのような規準があるか

『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008年刊)ではCASの活動について4つの規準を示しています。

- ・ 意味のある成果をもたらす具体的な体験と目的を伴う活動
- ・ 個人的な挑戦——挑戦する課題は生徒の成長を促すもので、達成可能な範囲のものであること
- ・ 計画や、プロセスの見直し、報告などでの深い考察
- ・ 成果および個人的な学習についての「振り返り」

提案されるCASの活動はすべて、この4つの規準を満たし、かつCASの3つの要素のうち最低でも1つにあてはまるものでなければなりません。

さらにCASの活動は次のようなものでなければなりません。

- ・ 体験的な学習を提供するもの——「計画」「行動」「振り返り」
- ・ 目標または成果のあるもの
- ・ 計画されたものであり、評価の対象とされるもの
- ・ 期間の長さがさまざまであるもの
- ・ できる限り生徒自身が自発的に始めたもの
- ・ 生徒に必要なとされる関与の度合いがさまざまであるもの

生徒は、CASの活動を計画する際に、CASの学習成果を1つ以上達成することができるかを考えることが望まれます。結果として、見込んだ成果を達成できないこともあるかもしれませんが、計画段階で成果について検討しなければなりません。さらに、はっきりした目的をもって活動を始めるために、生徒は最初に目標を設定する必要があります。自分自身の役割や、自分自身がつ機会をより明確に知るにつれて目標は変化するかもしれませんが、目標を定めてから開始することが重要です。

活動がCASに適切であるかどうかは、CASコーディネーターが判断します。生徒との話し合いを通じて判断されるのが理想的です。最初CASとして不適切と見なされた活動を適切な活動へと転換していくことは多くの場合において可能です。生徒が新たな挑戦を見だし、個人的な目標を設定し、他の要件を満たすことができれば、多くの活動をCAS活動として有効なものとすることができます。

CASコーディネーターと生徒は、活動がCASに適したものかを判断するために、CASの「ねらい」について理解する必要があります。例えば、CASが生徒に「自分自身の長所や限界を理解し、目標を定め、自己成長のための計画を立て」(6ページ参照)、

---

「知的、身体的、創造的、情緒的経験を伴うさまざまな活動を楽しみ、意味を見いだせる」(6ページ参照) 機会を提供するものであるということを理解しなければなりません。

## 活動がCASとして見なされるにはどの程度の計画が必要か

「計画」は、CASのすべての活動において欠かせないステップです。どの程度の計画が必要かは、活動により異なります。CASに取り組む生徒自身が、CASコーディネーターやCASアドバイザーと相談しながら、何が必要になるかを定めるべきです。

計画をほとんど必要とせず、終了時に簡単な「振り返り」をするだけの自然発生的な活動もまたCASの活動として認められます。こうした活動をもって、生徒のCAS体験のすべてとするべきではありませんが、CASプログラムの一環として認められます。

## 活動がCASとして見なされないのはどのような場合か

すべての活動は、『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008年刊)に記載された規準を満たさなければなりません。さらにCASの活動は、次のようなものであってはなりません。

- ・安全でないもの
- ・社会的格差をもたらすもの、または社会的格差を拡大させるもの
- ・つまらないもの、平凡なもの、変化のないもの
- ・布教活動を含むもの

## 宗教的な性質をもつ活動は認められるか

宗教的な性質をもつ活動は、CASコーディネーターの懸念するところとなり得るもので、個々の場合に依じて検討される必要があります。『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008年刊)では「困難でデリケートな分野ですが、原則として、宗教的儀式や布教活動と解釈され得る活動はCASとして見なされません」(19ページ参照)とされています。

しかし、例外もあります。宗教団体が行う活動の対象が、その宗教の信者であるかどうかを問わないような場合がこれにあてはまります。『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008年刊)では「CASの活動の原則を導く理念は、生徒の経験を広げ、異なる社会のおよび文化的背景をもつ人々を理解するように促し、明確な目標をもつ、ということです。これらの規準にあてはまる場合、地域社会において宗教グループが実施した活動で、目的が明確に非宗教的である場合はCASとして認められるかもしれません」(19ページ参照)とされています。地域社会に対して布教を目的としていない支援やサポートを提供する宗教グループは多く存在しています。

さらに、生徒が取り組んだ活動について、1つ以上の学習成果を満たすもので、布教活動ではないということを示すことができれば、その活動はCASの活動とすることが可能です。CASコーディネーターまたはCASアドバイザーは「生徒が提案する活動がCAS

---

のどの学習成果にあてはまり、CASの要件を満たすためにどのように学習成果を強化していくのかについて生徒に質問すると良いでしょう」としています。(19 ページ参照)。

## 1つの活動に2つまたは3つのCASの要素を組み込むことは可能か

可能です。例えば、生徒は2つのCASの要素を組み込んだ活動に参加することができます。生徒は、「活動」と「創造性」、「奉仕」と「活動」、または「創造性」と「奉仕」の目標を設定し、両方の目標を達成することで、両方の要素の要件を満たすことができます。

活動によっては、CASの3つの要素のすべてを統合することもできます。例えば、生徒がダンスの振り付けをし、これを高齢者施設で上演する場合、振り付けは「創造性」、ダンスは「活動」として見なすことができます。また、通常このような上演に足を運ぶことが困難な観客に対して上演することを「奉仕」として見なすことができます。生徒が全3要素に対してそれぞれ別の目標を設定すれば、その活動はCASの全3要素を組み込んでいることになるでしょう。

## 模擬国連への参加はCASと見なされるか

見なされます。討論の中で国連加盟国の利害を説明することは「創造性」となり得ます。生徒が会議の準備に参加した場合には、「奉仕」とすることができます。CASの4つの規準は常に満たされている必要があります。

## 「自主的に始めた」とはどういう意味か

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)では「生徒が取り組むCASの活動の中には、自らが自主的に始めたものが含まれていなければなりません。その他のCASの活動は学校によって開始されたものであってもかまいません」(15 ページ参照)とされています。つまり、可能な限り生徒が自主的に計画し、活動を開始することが求められているのです。既存の活動やプロジェクトについて、新しいアプローチや新しい取り組み方を計画した場合も「自主的に始めた」と見なされます。

## すべてのCASの活動で「協働する」ことが必要か

いいえ。公式に「<sup>コラボレーション</sup>協働する」ことが求められるのは「CASプロジェクト」のみです。協働する相手は、生徒同士であっても、生徒と他の人であってもかまいません。しかし、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)では、「CASプロジェクト」のみではなく、さまざまなCASの体験で「他の人と協働した」という学習成果を満たすことを奨励しています。他の人との協働は、「チームスポーツやバンドでの音楽演奏、幼稚園での手伝いなど、さまざまな異なる活動」(7 ページ参照)などでその取り組みを示すことができます。

---

## ペットを散歩させることはCASの活動と見なされるか

例えば、生徒が身体的に障害を抱えている場合、またはそうした状態から回復する途中であるような場合は、ペットを散歩させることが個人的な挑戦となることがあり得ます。または生徒が、障害者または高齢者のペットを散歩させているような場合はCASと見なされ得ます。CASに取り組む生徒は、活動が「つまらないもの (trivial)」(15 ページ参照) であってはならず、CASの活動の4つの規準に照らして考える必要があります。

## 金銭が支払われる活動はCASの活動と見なされるか

『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008 年刊) では、活動は無報酬で自発的なものでなければならぬと明記しています。CASの「創造性」および「活動」に関わる活動に対して金銭が支払われることを禁ずる規則はありませんが、CASの精神に沿ったものではないという議論もあり得ます。そのため、生徒がCAS活動で得た収入を、CASでの個人的な目標に関連したチャリティーやプロジェクトに寄付するよう求めている学校がしばしば見られます。

## 無償で仕事をした体験はCASの活動と見なされるか

「生徒がCASのガイドラインに沿った活動に取り組む場合(例えば、CASの学習成果を収めることができたり、生徒の意志で始めた活動や選択を含む活動であったりする場合)」(16 ページ参照)、無償で仕事をした体験は、生徒のCASの体験に有益となり得ます。『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008 年刊) では、「その活動が国家資格やその他の賞などの要件を満たす」(16 ページ参照) 場合にも、CASと見なすことができる、とされています。これは、生徒が公的な要件を満たすために仕事を行う体験に参加している場合で、かつ、その仕事の体験がCASの規準を満たす場合には、CASとして見なされるということです。条件を満たしているかどうかを確認するのは、生徒の責任であるとともにCASコーディネーターの責任です。

## 営利団体での奉仕活動はCASの活動と見なされるか

学校は、営利団体での奉仕活動を禁止することができます。営利団体では、生徒が取り組む仕事を雇用した人員によって手がけることができるためです。さらに、その仕事が奉仕活動の規準を満たさないおそれもあります。「奉仕活動が、生徒の学習に有益であることが重要です。そうでなければ体験的な学習とはならず(したがってCASとはいえません)、生徒の時間を使う意義がありません。平凡で繰り返しの多い活動や、実際の責任の伴わない『奉仕』は除外されます」(17～18 ページ参照)。その営利団体が生徒に適切なものであるかどうか、また、生徒が提案するCASの活動がCASの規準を満たすかどうかの判断はCASコーディネーターに委ねられています。



---

## 生徒はCASの要件を満たすために外国へ行く必要があるか

ありません。学校によっては外国でCASプロジェクトを実施しているところもあるかもしれませんが、「グローバルな重要性のある問題に取り組んだ」とは、生徒がどこかへ行かなければならないという意味ではありません。「グローバルに考え、ローカルに行動する」とは、可能であればプロジェクトは地域社会でも実施されるべきであることを示唆しています。

国際的な問題が地域社会においても関連して存在していることを明確に見いだせる場合には、国際的な状況において奉仕活動を行うことが有意義となるでしょう。海外での奉仕活動は、渡航や奉仕に関する背景、理解および知識がなければなりません。そうでなければその体験は、娯楽的なものとして誤った認識を招くおそれがあります。生徒が明確な目的意識をもち、その行動が真のニーズに合致したものであれば、価値は増幅します。

海外への渡航は、メリットがあるかもしれませんが、それが生徒にとってのCASの体験のすべてであってはなりません。CASはDPと同時並行して最低18カ月間にわたって行われなければならないからです。

## 学校は外部組織にCASの活動を提供してもらうことができるか

学校によっては、生徒にバランスのとれたCASプログラムに参加するよう促すため、選択肢の1つとして、外部組織を活用しています。

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)では「地域社会などでは、CASの定期的な活動や大規模プロジェクトのサポートとなり得る、信頼のできるさまざまな機関を見つけることができます。学校は外部機関との綿密な連絡を維持し、生徒がCASの要件を満たせるようにすべきです」(21ページ参照)とされています。

さらに、「学校は、非政府組織(NGO)などの適切なパートナーや仲介者とともに活動する必要があります」、「個人やコミュニティに提供される奉仕が適切であることを保証するとともに、生徒が自分自身の行う人間的な活動の重大さを理解する」(18ページ参照)ものであることを確実にする必要があります。CASコーディネーターは、営利目的の活動提供者を利用する場合には、IBの精神やCASの要件に沿って行動するよう確かめなければなりません。

## 異なる文化的背景をもつコミュニティとの活動で考慮しなければならないことは何か

異なる文化的背景をもつコミュニティとの活動は、「人間らしさ」の共有に重点を置いたパートナーシップに基づく活動として展開されなければなりません。学ぶことと奉仕活動をするものの両方を目的とするべきです。CAS活動は、他の人びとのコミュニティの問題を解決するためではなく、奉仕活動を通じて文化の多様性への認識を築いていくためにあります。「豊かさや多様性」よりも「欠陥」に焦点をあてるのでは、パートナーシップの精神を築くことはできません。文化に対する繊細な感受性がCASの実施においては

---

最も重要です。したがって、そのため生徒がどのような文脈で奉仕活動を行うのかを理解することが大切です。文脈の理解には、文化的、宗教的、経済的、言語的な側面への意識をもつことが含まれます。

コミュニティ内の人との交流は、多様な文化の理解を促し、継続した関係を深めるかもしれません。「奉仕活動のニーズを確認するために、関係するコミュニティまたは個人との事前のコミュニケーションや十分な相談が特に必要であることを意味しています。この相互的な交流に基づくアプローチは、奉仕を受ける側の人の潜在的利益も、生徒の学習の機会も増大させます。このような事前のコミュニケーションや相談は、直接、生徒自身が行うのが理想的です」(18 ページ参照)。

## 奉仕とサービスマーケティングの違いは何か

CASにおける奉仕とは「無報酬で自発的な交流活動」（4ページ参照）です。さらに、『「創造性・活動・奉仕」（CAS）指導の手引き』（2008年刊）では、「奉仕活動が、生徒の学習に有益であることが重要です。そうでなければ体験的な学習とはならず（したがってCASとはいえません）、生徒の時間を使う意義がありません」（17ページ参照）とされています。以下の体験的な学習活動のモデルは、奉仕活動から得られる学習上の価値を明確に示しています。

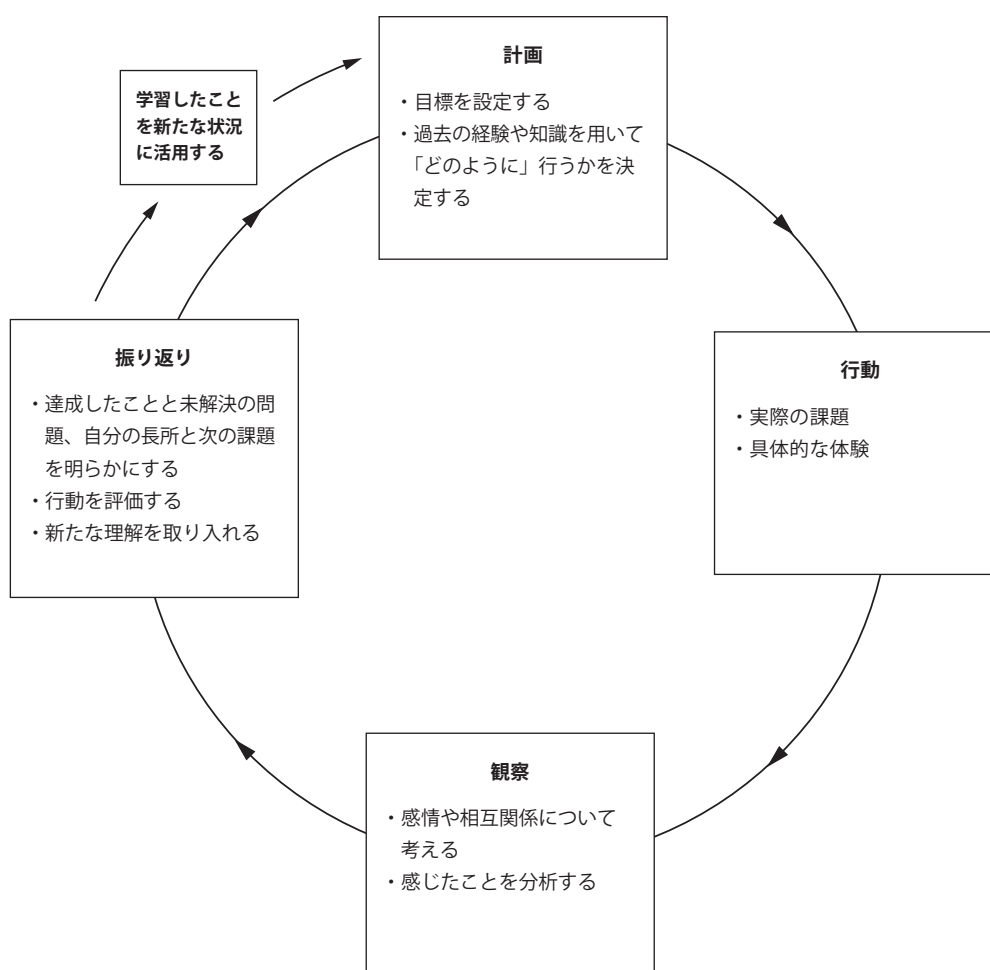


図1 体験的な学習活動のサイクル 出典『創造性・活動・奉仕（CAS）：指導の手引き』

『「創造性・活動・奉仕」（CAS）指導の手引き』（2008年刊）では、サービスマーケティング（奉仕活動を通じた学習）を、DP科目の課題（コースワーク）と奉仕活動とを関連づけるものとしています。DPの教師はCASコーディネーターと協力して「教科での学びを拡張して展開するのに適した奉仕活動を計画する」（18ページ参照）のです。サービスマーケティング（奉仕活動を通じた学習）の活動は、DP科目の課題の延長であるべきで、特定の科目の一部として見なされるわけではありません。

## 生徒はいくつのプロジェクトを実施すべきか

『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008 年刊) では「生徒は、チームワークを要し、『創造性』、『活動』、『奉仕』のうち2つ以上の要素を統合したプロジェクトに少なくとも1つ参加しなければなりません。プロジェクトは、一定の期間にわたるものである必要があります」(16 ページ参照) とされています。これ以外には生徒が参加すべきプロジェクトの数についての要件は示されていません。何が適切かは、生徒自身の判断に委ねられています。ただし、「指導の手引き」では、可能な場合には「生徒にさまざまな異なる背景での多岐にわたるプロジェクトに参加する」(21 ページ参照) ことを奨励しています。多岐にわたるプロジェクトに参加することで生徒は、CASの異なる要素を統合したプロジェクトを計画したり、そうしたプロジェクトに関わったりすることができます。

## 「一定の期間にわたる」プロジェクトとはどういう意味か

IBが「一定の期間にわたる」という言い回しを用いているのは、CASコーディネーターと生徒が、どのようなプロジェクトをつくり、展開するかについて柔軟性や自律性をもって決定することができるようにするためです。IBはプロジェクトの期間について特に何も規定していません。「一定の期間」とすることで、プロジェクトが1日限りのイベントではなく、生徒が持続的に活動に参加するのに十分な時間をもったものだということがわかります。

CASコーディネーターは、生徒と協力して「一定の期間にわたる」プロジェクトとは何かを決定する必要があります。最低または最高の時間数、日数、週数、月数というものは規定されていません。プロジェクトは、生徒が「問題が発生した場合に、進捗を省みて計画を調整でき」、「粘り強さと活動への深い関わりを示すこと」(26 ページ参照) ができるような、他の人と協働することを要するものが望まれます。

## 生徒はどのように「振り返り」のスキルを身につけるのか

「振り返り」のスキルは、自然に身につくものではなく、育成されなければなりません。「振り返り」へと導く質問、グループミーティング、意欲を起こさせる考察や読み物、示唆に富む映画などはすべて振り返る力を養う助けになります。CASと「知の理論」(TOK)とを関連づけることで、「振り返り」を通じて「体験的な学習活動のサイクル」を強化するための価値ある機会が得られます。

CASに取り組む生徒は、**どのように**「振り返り」をするかについて指導を受けます。CASコーディネーターは、「**振り返り**」とは何か、**どのように行うのか**という重要で深い内容を指導します。指導では、以下のような取り組みが可能です。

- 「振り返り」の概念を再考する。

何が「振り返り」であり何がそうでないかを明確にすることを含め、不可欠な要素を示したり、過去に「振り返り」について考えた時のことを生徒に説明させたりします。

- 「振り返り」の見本を示す。

生徒はロールモデルを通じて学習するという考えに基づき、CASコーディネーターが自分自身の「振り返り」の仕方を生徒と共有します。個人的な内容を公開することより、むしろ「振り返り」がどのように見えるかという実際のイメージや、「振り返り」を行うさまざまな方法を提供することに重点を置きます。

- 「振り返り」を導く。

生徒を「振り返り」の体験に参加させることで、1対1や、生徒同士のグループでの討論など、さまざまなアプローチに対応できるようにします。「振り返り」のプロセスを多様化することは、全生徒に多様な自己認識や表現の方法を発見させ、学習スタイルに違いをもたらします。

- 生徒の「振り返り」を共有する。

許可を得た上で、過去の生徒の「振り返り」を共有します。または現在価値ある「振り返り」をしている生徒が同級生を指導することもできます。

- 「振り返り」をサポートするためのヒントや助言を与える。

CASコーディネーターは生徒とともに、思慮深い反応を導き出すような一連の質問、意見の表明（ステートメント）、または体験の提案などを考えます。CASプログラムのどの要素にも適切であるものを考えます。

## 生徒は自分自身のCASの活動について どのように「振り返り」をするのか

生徒は、「振り返り」をした<sup>エビデンス</sup>証拠を示す方法を自由に選択することができます。写真、イベントの記念品、スクラップブック、メモリーボックス、<sup>エッセイ</sup>小論文、説明文書、詩、ブログ、口述記録、ビデオなどの方法があり得ます。

生徒は、CASのログまたはジャーナル（記録日誌）をつけなければなりません。これは「生徒は参加したCASの活動を記録し、『振り返り』をすることが求められます。ブログ、ジャーナル、注釈付写真日記、オーディオやビデオ日記など、さまざまな形式が認められます」（25 ページ参照）とされているためです。

## 生徒はどの程度「振り返り」をすべきか

「振り返り」は体験的な学習の鍵となる要素です。CASに取り組む生徒は、自分自身のCASの活動について「振り返り」をすることが期待されます。優れた「振り返り」とは、量ではなく質です。適切な「振り返り」の量と方法については、生徒がCASコーディネーターと話し合い、共通の認識をもつことが重要です。「振り返り」は、生徒のCASの活動への参加や、活動の性質、複雑さに応じて行われるべきです。生徒がすべての活動

---

に深い「振り返り」を行うことは期待されていませんし、そのような意図もありません。どの活動にどの程度、「振り返り」をするべきか、また学習成果を収めたかどうかについて、「振り返り」をするのに十分な価値がある活動であるかどうかは生徒の判断に委ねられます。

CASに取り組む生徒が、個人的な体験を通じて、学習を最大限に増大させ、自分自身および世界への知識を深めるために「振り返り」が重要な価値をもつことを理解した時に初めて、「振り返り」に時間を使うことが体験の一部となり、意味あるものとなります。自らの意思で行われていると見られる時、「振り返り」は、青年期の発育段階のこの時期において最も意味あるものとなります。

## 「振り返り」とCASの学習成果

生徒とCASコーディネーターにとって、CASの学習成果とは、生徒が成功裏にCASを完了したか否かを測るための鍵となる要素です。CAS体験の結果、生徒は「自分が取り組んだ活動について記録し、8つの主要な学習成果を達成した証拠<sup>エビデンス</sup>を提出する必要があります」（4ページ参照）。証拠<sup>エビデンス</sup>の多くは、「振り返り」の中で示されることとなります。しかし生徒はすべての「振り返り」をCASの学習成果に照らして記述する必要はありません。特に活動の初期段階においては、目標や状況への対応など、他の側面に焦点があてられるでしょう。

## 「倫理的な意味」という学習成果の理解

CASに取り組む生徒に、CASの学習成果について説明し、生徒とともに認識を深めることは重要です。生徒によっては、「活動の倫理的な意味を考察した」という学習成果が難しい場合があります。この学習成果では、生徒が自分自身、他の人、そして地域社会に自分自身の行動がもたらす結果について「振り返り」および理解することを促しています。「CASの活動中には、多様な倫理的問題が自然に発生します。生徒にとっては（例えば他者に対する）自分自身の考えや本能的な反応、振る舞い方に揺さぶりをかけられるような体験となるかもしれません」（5ページ参照）。このような体験は、CASの活動での自分の行動に関する倫理的な意味を考察することへと生徒を導きます。

「CASでは、生徒のアイデンティティーの構築に役立つことを重視しています。『IBの使命』や『IBの学習者像』の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティーを構築するのを後押しする」（5ページ参照）ことを生徒に説明しなければなりません。

CASコーディネーターは、生徒に学習成果を説明するために「IBの学習者像」の倫理的側面に焦点をあてた質問をしたり、この学習成果を「知の理論」(TOK)での学習と関連づけたり、インターネットで倫理的問題を調べさせたり、グループ討論で倫理的なシナリオを提供したりすることができます。

## CASと「知の理論」をどう関連づけるか

CASと「知の理論」(TOK)は、DPの中核を成す「コア」を構成する要素であり、互いに補完し合うものです。CASでは、主に教室の範囲をこえた活動に取り組み、体験がどのように個人を成長させるかについての理解を深めるために「振り返り」をします。TOKでは、形式に基づいた批判的思考のスキルを培うことを目的としており、「振り返り」に対して、より体系的で分析的なアプローチが求められます。また、哲学的思考や認識論的思考を用いて「振り返り」をすることを促します。

CASコーディネーターとTOKの教師は、よくコミュニケーションをとり、お互いが取り組んでいる課題を認識し合うことが重要です。CASコーディネーターは、TOKの教師とともに指導することで、TOKのトピックと体験的な学習との自然な関連性を見つけ出すことができます。このような関係は、生徒がCASプログラムでTOKでの内容を用いたり、その逆を行う際に役立ちます。

「振り返り」が、DPの「コア」であるこの2つの要素の橋渡しの鍵となります。TOKでは、どのように学ぶか、何を学ぶかに関連する問題について、批判的に「振り返り」をする方法を教えることを目標としています。特に、TOKでの「どのように知るのか」という問題は、生徒がより有意義に「振り返り」をするのに役立ちます。TOKはまた、生徒が自分自身のもっている価値体系について注意深く考えるのにも役立ちます。

CASでは、生徒が自分の体験や、自分や他の人への影響について「振り返り」ができるようになることを目標にしています。CASは、生徒が実生活での体験に取り組む機会を提供しており、CASでの体験がTOKでの価値あるリソースとなることもあり得ます。CASの活動は、TOKでの議論における「知っている」ということや知識に関わる問題に基づいていることもあります。また、CASの活動とそれに続く「振り返り」は、TOKでの議論やプレゼンテーション、エッセイ(小論文)のきっかけとなったり、そうした成果の一部を成すこともあります。また反対に、生徒がCASの活動について単に説明的なだけではない「振り返り」ができるようになる可能性もあります。

## CASと「課題論文」をどう関連づけるか

生徒が取り組むCASプロジェクトや活動は「課題論文」(EE)の刺激となり得ます。どの学習分野もEEと結びつく可能性があります。例えば、グループ3の「個人と社会」であれば、「経済」の論文で、学校による社会活動プロジェクトの費用便益分析に取り組むかもしれません。高齢者介護施設での活動が、オーラルヒストリーを用いた「歴史」のEEへとつながるかもしれません。あるいは、CASの活動が、ホームレスの所在や、家から出た理由および影響に関する調査へとつながるかもしれません。「生物」や「化学」では、環境問題への取り組みが、生態系や大気汚染の原因の調査へとつながるかもしれません。炊き出しでの奉仕が、食料安全保障に関する「ワールドスタディーズ」のEEへの興味を刺激するかもしれません。

## 第2部 導入と準備

### CASはいつ開始するか

正式にはCASは、DPの第1年次の開始と同時に始まります。CASは、DPでのアカデミックな学習による重圧を和らげるという重要な側面もあります。『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008年刊)では「CASの活動を定期的に、できる限りプログラムの全期間にわたって行うことが重要です。少なくとも18カ月間以上続けるべきです」(4ページ参照)とされています。生徒はDPの第1年次の開始から最低18カ月間、CASに参加しなければなりません。

### DP第1年次開始前の休み中にCASを開始しても良いか

開始してはなりません。CASはDPの第1年次の開始以前に始めることはできません。学校によってはDP開始前の学年の生徒に、DPの第1年次の開始前の休み中にDPに向けた準備をすることを奨励しているところもあります。例えば、CASを開始するための準備として、活動に関する機会や興味を見つけることにこの期間を費やすことはできます。ただし、DP開始以前に行ったどのような活動もCASプログラムとは見なされません。

### DPの第1年次と第2年次の間の休み中にCASに取り組んでも良いか

DPの第1年次と第2年次の間の休み中にCASの要件を満たすためのCASの活動に取り組んでも良いかどうかは、CASコーディネーターが判断します。この期間は、生徒に価値あるCASの機会をもたらすことがよくあります。生徒が休み中にCASの活動に取り組み、その結果として1つまたはそれ以上の学習成果を収めたことについての有益な「振り返り」ができる可能性があります。

CASは「時間数を数える」ためのものではないので、生徒がDPの第2年次の間に行う代わりに休み中にCASを完了することは許されません。

### CASはいつ終わるのか

CASは、生徒が8つの学習成果のすべての証拠<sup>エビデンス</sup>を整えた時点で終わるではありません。『「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き』(2008年刊)では、「DPでは、同時並行的な学習を重視しています。したがって、CASの活動を定期的に、できる限りプログラムの全期間にわたって行うことが重要です。少なくとも18カ月間以上続けるべきです」(4ページ参照)とされています。CASコーディネーターは、生徒に対してCASプログラムを最終評価の前に完了して試験準備に集中するのを許可することができます。

DPコーディネーターは、6月1日(最終試験を5月に実施する学校の場合)、または12月1日(同11月に実施する学校の場合)までに、IBインフォメーションシステム(IB



---

IS) 上に、(必要な場合には) どのIB資格取得志願者または再試験志願者がCASの要件を満たしていないかを示す必要があります。

## すべてのCAS活動で指導監督が必要か

必要ではありません。スーパーバイザー(監督者)の規定は学校の自由裁量です。CASコーディネーターは、学校のCASプログラムの質に責任および報告義務を負います。「CASコーディネーターは、DPの2年間にわたり生徒の進捗をモニタリングする体制を必ず整えなければなりません」(22ページ参照)。『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)ではさらに、生徒の進捗をモニタリングするには「活動スーパーバイザーは、教員または学校コミュニティの関係者ではない場合もあるので、無断欠席など、何か問題があった場合に報告するように手配する」(22ページ参照)ことを薦めています。

CASコーディネーターが、活動が安全であり、生徒が出席および参加に関して正直に記録することについて信頼できると判断する場合には、指導監督がなくてもかまいません。「生徒がCAS活動を『自分のものとする』べきという原則から、生徒自身が無責任で信頼するに値しないことを示したのでなければ、生徒を自分で決めたことを成し遂げられるものとして信頼するべきです」(22ページ参照)。

活動スーパーバイザーの主要な役割は、活動の安全かつ秩序ある運営を確かめること、生徒の出席および参加を点検すること、生徒の活動の取り組みに関し、生徒の「振り返り」に焦点をあてて助言をすることなどです。生徒の安全を確保することが求められる状況や、生徒が「自身の活動の進行に困難を来したり、厄介な状況の中で」(22ページ参照)取り組んでいる状況では、スーパーバイザーの活躍が求められます。

## 全活動で活動終了時にスーパーバイザーの承認を受ける必要があるか

必要ありません。IBは承認を受けることを求めています。生徒の活動に対し、スーパーバイザーの承認を受ける必要があるかどうかはCASコーディネーターの判断によります。

## CASとして認められるための最低限の時間数はあるか

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)では学習成果を重視しています。「学習成果は、CASの活動の質(生徒の成長への寄与)が最も重要であるということを示しています」(7ページ参照)。

優れたCASプログラムとは、生徒が18カ月以上にわたりCASの3つの要素に取り組み、かつ、この3要素のバランスがとれているものです。さらに、CASの活動は、生徒が8つの学習成果を満たすことができるものであるべきです。

CASの目的とは、生徒が「体験的な学習を通じて、生徒の人間の成長と対人スキルの発達」を促すことです。CASは「DPでのアカデミックな学習による重圧を和らげると

---

いう重要な側面もあります。良いCASプログラムとは、やりがいもあり楽しくもあり、自己発見の契機となるもの」（4ページ参照）であることから、時間数を数えることはこのCASの目的を無意味にします。しかし『「創造性・活動・奉仕」（CAS）指導の手引き』（2008年刊）では150時間というガイドラインを示し、CASコーディネーターがCASに要求される関与の度合いのレベルを理解できるようにしています。

## CASは授業時間内に行うことができるか

学校でCASプログラムを実施する方法はさまざまです。以下のようなものを含まますが、これに限定されるわけではありません。

- ・「計画」、「振り返り」、CASコーディネーターまたはCASアドバイザーとの面談、グループディスカッションなどを生徒が行うために毎週CASの時間をスケジュールに設定する。
- ・CASの活動を行うための時間を毎週のスケジュールに設定する。
- ・すべてのCAS関連活動を学校の時間外に行う。
- ・あらかじめ設定した授業時間内の時間と放課後の時間を組み合わせる。

IBは、CASを学校の時間割に組み込むことについて強制も推奨もしていません。一方、「計画」、「ディスカッション」、「振り返り」の時間を時間割に組み込むことが、生徒のCASプログラムを支援するのに役立つとするCASコーディネーターもいます。

## オンライン記録システムの長所と短所は何か

生徒はコンピュータの扱いに慣れているため、なじみのある環境でCASの記録をするのにオンライン記録システムは素晴らしい機会を提供しています。これを利用することによってCASコーディネーターまたはCASアドバイザーには生徒の「計画」「行動」「振り返り」をモニタリングするのが容易になるかもしれません。オンライン記録システムでは、生徒が写真やビデオ、「パワーポイント®」によるプレゼンテーション、インタビューの記録などのさまざまな形態の「振り返り」をアップロードすることができます。

学校は、学校固有のニーズおよび目的に合わせて独自のウェブサイトを開発することができます。その開発自体が、生徒のCASプロジェクトとなり得るのです。しかし、このようなウェブサイトへのアクセスが公になり得る場合には、生徒のCAS記録が確実に安全に保護されるようセキュリティーに関する方針が必要になります。

こうしたシステムで「すべてが行われる」ことで生じ得る懸念は、CASコーディネーターまたはCASアドバイザーの「CASを指導する」という役割が制限されることです。CASは「要件を満たす」ことが目的ではありません。生徒の人間の成長と対人スキルの発達を促す機会なのです。教育者には、生徒がCASのメリットを最大限に享受できるように生徒に助言したり励ましたりするという重要な役割があります。

オンライン管理ツールはいくつかあり、共通の長所および短所があります。

長所	短所
管理面が整備されており、活動および「振り返り」に関する記録を明確に記すことができる。	活動の質よりも量（時間数）に焦点があてられる。
生徒への明確なフィードバックのシステムが構築できる。	CASの関係者が、生徒との個人的な接触やディスカッションを軽視するようになる可能性がある。
多くの場合、生徒が利用しやすい「振り返り」の骨組みが提供される。	必ずしも生徒の真のパフォーマンスを示していないかもしれない型にはまった「振り返り」が行われるかもしれない。
生徒にわかりやすい方法を使う（例えば、生徒が親しんでいるブログやウィキなど）。	CASの関係者が定期的にネットに接している必要があるが、常に可能とは限らない。
オンラインサポートを提供し、生徒の転出入の際に学校間でのデータ移行が可能であり、モニタリングのためにIBがアクセスできる。	IBは記録にアクセスするには許可を得る必要がある。生徒の転出入の際の学校間でのデータ移行には事前承認が必要である。

ソフトウェアパッケージの1つの問題は、時間数に焦点が当てられていることです。そうすることで、設定時間数を達成すればその後はCASに取り組みなくてもよいと承認しているかのような印象を与えます。したがって、CASコーディネーターは、生徒にCASの活動は最低限18カ月継続しなければならないことを明確に伝え、設定時間数に注意するよりも学習成果を満たすように生徒に働きかけることが重要となります。

## CASコーディネーターの役割は何か

DPプログラムの提供が認定されている学校では、学校内でCASを円滑に運営する責任者としてCASコーディネーターを指名することが求められます。IB資料『DP：原則から実践へ』（2009年刊）では「CASの役割は、生徒が真に体験に基づく学習を行い、有意義な形でその体験を振り返る機会をつくることです。これには時間がかかり、また、CASの支援に関わる同僚たちと緊密に協力することが求められます」（21ページ参照）とあります。

CASコーディネーターには以下の役割があります。

- ・ コーディネーション
- ・ 管理運営
- ・ 指導／アドバイス
- ・ 監督

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』（2008年刊）には、CASコーディネーターの責任について詳しい概要が示されています。

## 学校はCASアドバイザーやCASスーパーバイザーを置く必要があるか

IBは、学校内にCASチームを設置することを必須としていません。責任を分担することでCASプログラムの管理がしやすくなるかどうかは学校の判断に委ねられています。生徒数にもよりますが、効果的かつ効率的に管理できる場合には、通常CASコーディネーターが1人でCASアドバイザーやCASスーパーバイザーの役割を果たします。

生徒数の多い学校でCASを効果的かつ効率的に管理するための支援策として、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)にCASコーディネーター、CASアドバイザー、CASスーパーバイザーの役割、そしてこれらの役割がどのように実りあるCASプログラムに寄与するかについて明確に記しています。「規模の大きな学校の場合、生徒が自分自身のCASの体験を最大限に役立てられるよう支援するために、CASコーディネーターの指示のもとで**チームアプローチを取り入れることが不可欠**です。中心となるメンバーは、CASコーディネーターと**CASアドバイザー**で、CASアドバイザーは各生徒に向けて、個別的なアドバイスと支援を行います」(9ページ参照)。

生徒数の多い学校では、CASコーディネーター、CASアドバイザー、CASスーパーバイザーの間で責任を分担することで、CASが確実により実りあるものとなることでしょう。

## CASアドバイザーとCASスーパーバイザーの違いは何か

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)には、「指導/アドバイス」および「監督」について、何が必要かが明記されています。CASアドバイザーは、1人または複数の生徒の指導者として、CASコーディネーターを支援します。主に、生徒が活動についてディスカッションをするのを支援し、目標を定める手助けをし、「振り返り」を実践する生徒をサポートし、生徒の活動と学習成果との関連づけるのを手伝ったりする役割があります。

CASスーパーバイザーは、必要に応じて生徒の活動やプロジェクトに実際に赴き、生徒の安全を確保し、出席を確認し、問題がある場合にはCASコーディネーターやCASアドバイザーに報告します。

## CASコーディネーターはどのようにして生徒が8つの学習成果を達成したことがわかるのか

CASの学習成果の定義は概略的なものですが、特定の目的と意図に基づいています。学校によっては、はじめは生徒が活動と学習成果を関連づけるのを手伝い、徐々に生徒が自分の力で学習成果を理解し、これを活動に適用していくことができるように導いています。CASコーディネーターは、学習成果を「可視化」するための「ガイディングクエスチョン考察を促すための問い」(guiding question)を用いて、質問リストを作成するとよいでしょう。CASコーディネーターは、生徒の「振り返り」やその証拠、およびディスカッションを点検し、例えば

「見本B：生徒別CAS完了フォーム」（29 ページ参照）などを用いて、8つの学習成果が達成されていることを確認します。

学習成果の達成をモニタリングするには、CASコーディネーターまたはCASアドバイザーは、少なくとも第1年次の間に2回、第2年次の間に1回（CASの体験の開始、中間、完了時点において）、生徒との面談を行う必要があります。これらの面談では、生徒の話聞き、アイデアを交換し、生徒が価値あるプロジェクトに関与することを奨励し、助言を行い、CAS体験の「振り返り」をするのを手助けします。また、これは学校がCASのプロセスや支援体制を振り返り、改善するのにも役立ちます。

CASの面談は、半ば組み立てが定まっており、深く掘り下げた内容となっています（しばしば「目的に即した会話（conversation with a purpose）」と呼ばれます）。会話中に自由形式の質問や、会話の進行に対応するトピックが採用されます。これにより生徒が考えや、感情、懸念を共有することができます。面と向かって奥行きのある深い会話を行う機会となっています。

## CASの面談中にどのような種類の質問をするか

以下は質問の例です。CASコーディネーターは生徒のニーズ、背景、状況に合った質問を考えることが奨励されています。

### 生徒をよく知るために

- ・ これまでにどのような活動を行っていますか。これはあなたにとって新しいものですか。次の段階に進むには何をしますか。
- ・ あなたが参加したいと思う活動はすでに存在しているものですか。なぜ参加したいと思っているのですか。
- ・ 放課後何をしたいと思いますか。
- ・ 何の活動またはプロジェクトを始めたいですか。
- ・ どれくらいの期間この活動をしていますか。どれくらいの頻度で行っていますか。
- ・ なぜこの活動を選んだのですか。
- ・ プロジェクトに関連づけることのできる趣味や特技はありますか。
- ・ 以前にどのような活動をしたことがありますか。
- ・ あなたが興味を感じていることは何ですか。
- ・ あなたが嫌いなことは何ですか。

### 計画／目標設定

- ・ どのような活動をしたいと思いますか。
- ・ どのようなスキルを身につけたいと思いますか。
- ・ どのような新しいチャレンジに取り組みたいと思いますか。
- ・ この分野で以前あなたが取り組んだことのある活動と、この活動をどのように区別していますか。

- 
- ・どのような結論を想定していますか。
  - ・どのように取り組むつもりですか。
  - ・CASの活動に対して、どのようなアイデアがありますか。
  - ・これらの活動があなたに合っていると思う理由は何ですか。
  - ・この活動に参加することで何を達成したいと思いますか。

## 学習の成果

- ・個人での活動を好みますか。それともチームでの活動を好みますか。
- ・どこか世界の他の地域に住んだことがありますか。その経験はあなたにどのような影響を与えましたか（もしあれば）。
- ・世界の他の地域での出来事やニュースにあなたはどのように反応しますか。そのような出来事はどのような形であなたに影響していますか。
- ・変化をもたらすためにあなたが果たす役割は何であると思いますか。
- ・どのようにあなたが他の人の人生に影響したかもしれないと思いますか。何をしましたか。
- ・CASプログラムは1人の人間としてのあなたにどのような影響を与えると思いますか。
- ・あなたが期待することは何ですか。

## 2度目の面談

- ・プロジェクトをレビュー（検証）してください。
- ・あなたが抱いていた期待はどのように変化しましたか。
- ・プロジェクトの目標を達成するために何を変更または調整しなければなりませんか。
- ・このまま続けるのが良いと思いますか。それとも新しいプロジェクトを開始するのが良いと思いますか。
- ・最も楽しんだことは何ですか。または何から最も恩恵を受けましたか。
- ・どのようにスキルが上達しましたか。新しいスキルを身につけましたか。
- ・どのような活動を計画していますか。または次の段階は何ですか。
- ・新しい分野で何を探究するつもりですか。
- ・あなたのプロジェクトはCASの諸要素のバランスがとれていると思いますか。どのようにバランスがとれていると思いますか。
- ・あなたが参加した活動と8つの学習成果を関連づけることができますか。

## 最終面談

- ・目標は何でしたか。達成しましたか。
- ・変更しなければならなかったものがありますか。それは何でしたか。
- ・学習の成果を上げることができましたか。

- ・ その成果の証拠<sup>エビデンス</sup>はどこにありますか。どれですか。
- ・ どのような難題に直面しましたか。その難題にはどう対応しましたか。
- ・ あなたが取り組んだC A Sの活動は、バランスがとれていましたか。
- ・ 全体的な体験としてC A Sから何を学びましたか。有益なものでしたか。
- ・ 学習したことを将来どのように活用しますか。
- ・ 実際のC A Sは、C A Sへの期待と比べてどうでしたか。
- ・ C A S体験をひと言、ふた言で表してもらえますか。
- ・ C A Sコーディネーターからの支援はどれくらい役立ちましたか。コーディネーターからの支援として今後どのようなことが望ましいと思いますか。
- ・ 達成したことを祝います（生徒にどれだけ長い道のりを来たかを気づかせます）。
- ・ 何か驚いたことはありましたか。
- ・ 学習成果の達成の度合いはどのようなものですか。どの活動が8つの学習成果のどれと関連していますか。

## D Pの一環としてC A Sに取り組む生徒とC A Sのみ履修する生徒との違いは何か

2012年9月に始まる年度以降（2014年5月に第1回評価）、D Pを提供する学校の生徒は履修しているカリキュラムにかかわらず、別個に「知の理論」（T O K）、「課題論文」（E E）、およびC A Sを選択することができます。すべての生徒にこれらのD Pの中核となる要素を体験する機会を提供するという決定は、I Bの「アクセス方針」に沿ったものです。『「創造性・活動・奉仕」（C A S）指導の手引き』（2008年刊）、評価、「コア」の要件などに変更はありません。

C A Sの要件を満たした生徒はI Bから履修証明書（transcript of completion）が授与されます。

## 学校が配布する「C A Sハンドブック」には何を記載すればよいか

I Bは、C A Sコーディネーターが生徒に「C A Sハンドブック」を配布することを薦めています。C A Sハンドブックは、生徒や保護者、その他の学校コミュニティのメンバーにC A Sについて知らせる良い手段です。生徒がC A S活動を計画し、準備し、「振り返り」をする支援していくことにもつながります。

C A Sハンドブックの内容は、C A Sコーディネーターが定めます。ハンドブックには次の事項を記載します。

- ・ C A Sに関する理念
- ・ 体験的な学習の枠組み
- ・ C A Sの学習成果
- ・ C A Sの活動規準
- ・ C A Sプロジェクト提案フォーム
- ・ 「振り返り」のガイドライン

- ・ CASの記録提出のスケジュールおよび締切日の目安
- ・ 学校により提供されているCAS活動とCASプロジェクトのリスト（既存の活動またはプロジェクト、クラブ活動など）
- ・ リスク評価
- ・ 学校外でのCAS活動やCASプロジェクトへの生徒の参加に関する保護者の同意
- ・ 「知の理論」（TOK）および「課題論文」（EE）を含む他のDPコースとCASとの関連づけ

## CASコーディネーターはどのようにIBに生徒のCASのステータスを知らせるか

最近まで、学校はIB地域事務局にどの生徒がCASプログラムを完了したかを用紙に印刷したもの（ハードコピー）で通知していました。「CASプログラム完了フォーム」（CAS/PCFフォーム）は、『DP手順ハンドブック』から印刷されていましたが、IBISの「Candidate」（IB資格取得志願者）のタブから入手するように切り替わりました。この新方式の導入によりCAS完了（または未完了）の通知は、郵便、ファクス、または電子メール添付による送付に切り替えられ、ハードコピーでの提出ができなくなりました。

オンラインシステムへの変更は、紙をベースにしたシステムに比べて、いくつかの利点があります。IBにCASの要件を満たしていない生徒の情報を提出する期限が、5月1日から6月1日に、または11月1日から12月1日に変更（それぞれ1カ月後）になりました。また、CASを完了していない志願者は、報告およびCAS記録の提出が必要なくなりました。

## 生徒がCASの要件を満たさなかった場合どうなるか

CASコーディネーターは、生徒のCAS活動および実施について評価する責任を負います。もし生徒が要件を満たしたと評価できない場合、CASコーディネーターは、IBIS上の生徒のステータスを「はい」から「いいえ」に変更するように勧められます。その場合、IBディプロマは、CASを完了するまで保留となります。生徒は要件を満たすのに1年の猶予があります。生徒がCASを成功裏に完了した場合には、CASコーディネーターは「いいえ」から「はい」に変更します。他のすべての要件を満たしていれば、これにより自動的にIB資格が授与されます。

## 留年した生徒は卒業するまでCASを続ける必要があるか

必要ありません。CASを成功裏に完了しても、IB資格を授与されるためのすべての要件を満たしていない場合、その生徒は、CASプログラムを継続したり再開する必要はありません。



## CASコーディネーターはCASのために どのようなフォームを作成する必要があるか

『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)では、CASコーディネーターがCASのためのフォームを作成する際に参照できる2つの見本を掲載しています。

1. モニタリングの一環として、CASコーディネーターまたはCASアドバイザーと生徒が、最低でも第1年次で2回、第2年次で1回(CASの体験の開始、中間、完了時点において)面談することが望ましいとされています。これらの面談の結果は「CAS進捗フォーム」(「指導の手引き」の「見本A」参照)に簡潔に記載します。
2. 生徒がCASの要件を満たすために、『「創造性・活動・奉仕」(CAS)指導の手引き』(2008年刊)で設定されている8つの学習成果がすべて生徒に示される必要があります。CASコーディネーターまたはCASアドバイザーは、各生徒がCASを完了したかどうか判断を記録し、各学習成果の証拠<sup>エビデンス</sup>を記すことが求められます。必須ではありませんが、「指導の手引き」では「生徒別CAS完了フォーム」(「見本B」参照)を参照用として収載しています。

CASコーディネーターの中には、記録管理のため、また、生徒および保護者に生徒のCASの進捗状況を知らせるためにCASを成績表に組み込んだ方がよいと感じる人もいます。

## 学校はいつまでCASの記録を保存しておく必要があるか

学校は、最終試験後6カ月間、IB地域事務局からの要求に対応できるようにCASの記録を保管しておく必要があります。学校によっては、生徒が卒業後に進学する際、出願書類としてCAS記録が必要となる場合があるので、CASの記録を保存しておくところもあります。ただし、最終試験後6カ月をこえて記録を保存するかどうかは学校の判断に委ねられます。

## 転入してきた生徒はCASを最初から始める必要があるか

必要ありません。他のIB認定校から転入してきたDPの生徒は、その生徒が取り組んできたCASプログラムを継続することになります。生徒はCASコーディネーターとともに、自分が取り組んできたCASプログラムを新しい(地域の)状況に、どの程度適応させる必要があるかを見極めます。

第1年次の始めにDPを提供していない学校から転入してきた場合には、18カ月という期間を満たすのが難しいかもしれません。要件を満たすことができるような適切なCASプログラムを設定するかどうかは生徒と学校の判断に任せられています。

---

## 参考文献

Hill, I. 2010. *The International Baccalaureate: Pioneering in Education (The International Schools Journal Compendium, vol 4)*. Woodbridge, UK: John Catt Educational.

International Baccalaureate (2008). *Creativity, action, service guide*.

International Baccalaureate (2009). *The Diploma Programme: From principles into practice*.